

『うんこのラブレター』

野口 花（仮名）（27歳／東京都）

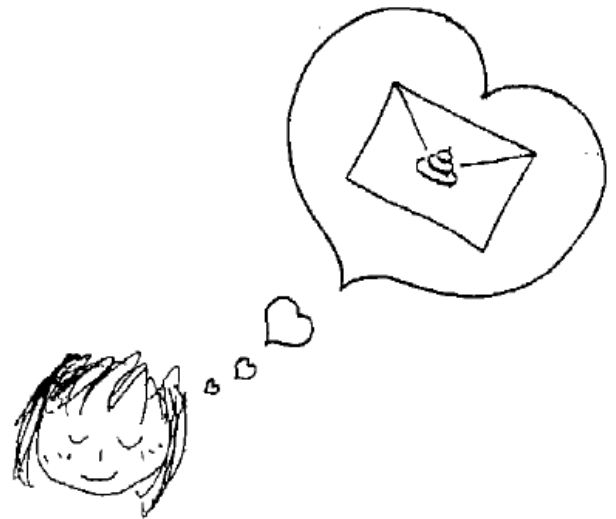
のぐちさんはノグソをしている、なんてあんまり大きな声でいうんじゃない。みんな好奇の目で見ると、眉をひそめられたり、変な誤解を受けることだってある。あまつさえ、好きな人に「今度一緒に」、と甘い言葉をささやかれたりもする（一緒にしません!）。しかしそれでは困るのだ。わたしにも立場ってものがあるのだから。

それでもわたしが（たまに）ノグソをするのは、それがとても嬉しいからだ。それにノグソは身をもって教えてくれる。目に見える「社会的な」立場よりも、目に見えないけれども、強くやさしく世界を支える分解者の立場に立ちなさいということ

を。誰だってノグソを恥じらう。それはその人が「社会的な」ことをよくわきまえているからだ。しかし、ノグソの楽しみはいつだって、「社会的な」立場を乗り越えて、自分の体がダイレクトに分解者とつながっていくという、生き物としての感動に他ならない。

わたしが改めてうんこと出会い、見つめ直すきっかけとなったのは、2009年3月21日、伊沢さんのジュンク堂での講演を聴いたからであった。多数の美しいキノコとうんこが土に還ってゆく様子を丁寧に追ったスライドは、伊沢さんの熱を帯びた語りど相まって、不思議な説得力を醸しだしていた。そして、なによりも衝撃だったのは、うんこをひとつの場として、虫や菌や小動物や木の根のダイナミックな交流が行われていることだった。彼らには、うんこは汚いとか、臭いとか、あるいはちょっと遊んでやろうとか、そんな気持ちは一切ない。ただ、そこにうんこがあるからくつつく。一所懸命にくつつく。それが大切な栄養だから懸命に格闘するのだ。人はそれを見て汚いというけれど、その営みがわたしたちを支えてくれている。うんこは分解され、吸収され、そうして自然は廻ってゆく。

その大きな流れを前にして、わたしはどうしても、ノグソをすることを避けられなかった。うんこにくつついて分解する虫たちや菌類が、その分解されたうんこを吸収する植物たちが、それぞれの立場で精一杯生きている。



そんな彼らの仕事のうち、ひとつだってわたしにはできないことなのだ。もちろんわたしも、自分の人間としての「社会的な」立場もそれなりにわかってはいるつもりだ。でも、それを乗り越え、生き物として、彼らに返礼をしなくてはいけない。それが信頼関係というものだから。（わたしは礼儀正しいのだ。）そして数日後、わたしは自転車に乗った。目指すは〇〇〇公園、ウン命の地である。

春の日の、空は青く霞んで穏やかに晴れていた。下がった目線の先を風がかけぬける。土のモコモコとした弾力を踏みしめると、いつもより草の香りが近い。遠くの葉が揺れて、木漏れ陽が降ってくる。かすかに湧き水の音が聞こえる。そっと息づいている森の気配に胸が高鳴る。ふと、空を見上げると、鳥が雲の間を渡ってゆく。森の底に沈んだようで、あたりはとても静かだった。

ノグソの楽しみはどこにあるのか。それは対話にあると思う。葉のゆらぎ、鳥のこえ、光と影、わたしと、わたしの体と、今までわたしだったうんこと、それを支える虫と菌類と仲間たち。うんこを媒介としたその対話を通して、循環の中で支えられ、愛されていることを知る。そして、愛に気づいて、身を以て愛を返したとき、信頼関係が築かれる。ラブレターフロムコウモン。うんこはラブレターだ。

もちろん、ラブレターを出さなくたって自然は怒ったりしない。でもきっと、ずっと待っている。わたしたちはいつだって確かに愛されているのだ。

ノグソは愛だと思う。